

第2部「わかりやすく親しみのある通りの愛称づくり」

1) 「洛西ニュータウンの植栽計画について」平井 義昌 環境部会委員

基本的に現在の植生を生かすこととしたが、竹林が殆どで、新林池公園、大蛇ヶ池公園で孟宗竹林、コナラ等を生かしたぐらいだった。街路樹について、9路線14 kmの道路と7 kmの自転車歩行者道に植栽し、路線ごとに樹種を選び、同一路線内で樹種は変えなかった。また、ケヤキ、トチノキ、ナンキンハゼ、アキニレ、サクラ等を植栽し、道路ごとの変化を計画した。新林本通は、読売新聞による日本街路百選に選ばれている美しい街路である。ニュータウンにおいて、市内で3番目に多いプラタナスがないと不思議に思われる方もいるが、当時、市内の西大路通や九条通のプラタナスが、アメリカシロヒトリ蛾により被害を受けていたので、植栽計画から外した。街路樹のもつ機能や効能は多く、ケヤキ1本で年間350kg（人の呼吸の年間二酸化炭素排出量は約320kg）もの二酸化炭素を吸収する。これほどの樹木を安易に伐採したり、強剪定をしないよう管理サイドに望む。



2) 「わかりやすく親しみのある通りの愛称づくり」藤原 篤 環境部会委員

洛西ニュータウンの通り名を、どれくらいの人知っているのかを調べるため、通り名の認知度調査をしたところ、半数の人が洛西の通り名をまったく知らず、主な通り名の認知度は、1/10から1/3程度であった。また福西地区の人は、小畑川の西側の通り名をほとんど知らないことも分かった。京都や彦根では、「通りの愛称」は覚えやすく、多くの市民に親しまれており、愛称名は池・川・樹木・山などの自然、人々の活動、建物など「通りやそのまわりのイメージ」に由来している。



「通りやそのまわりのイメージ」（＝洛西の宝）についてアンケート調査（回答者数50名、複数回答あり）したところ、ケヤキ並木（35（回答数））、小畑川（21（同））、イチヨウ並木（18（同））との回答があり、他には学校、竹林、小塩山などがあげられ、これらを「洛西ニュータウンイメージマップ」としてまとめた（参加者全員に配布）。

「わかりやすく親しみのある通りの愛称づくり」は、通りやまちへの愛着を高める（＝心のふるさととする）ほか、まちの魅力を発信し、新たな居住者を惹きつけることにもつながる。

3) 意見交換

Q. 洛西ニュータウン植栽計画の樹種の選定はどのように行われたのか？

A. 木陰をつくる樹種や、春には花、夏には新緑、秋には紅葉といったように四季を通して楽しめる樹種を選定する際の基準とした。

Q. 季節ごとに見所がわかる洛西ニュータウン植栽マップがほしい。

A. ニーズがあれば、今後、委員会・部会において検討していきたい。

Q. 正式名称（中山石見線、向日町停車場塚原線など）と新たな愛称とが異なることで問題がないのか？

A. 支障が生じないように配慮していきたい。

Q. 今の通り名がなじんでいるため、変更しなくても良いのではないかと？

A. 「わかりやすく親しみのある通り愛称」にすることにより、より多くの人々に「通り」が親しまれ愛されるようになると思われる。また、「愛称づくり」そのものがまちの宝を学ぶイベントになり、郷土愛も生まれ、地域の再発見や愛着向上につながることに期待される。



まとめ 安枝 英俊（委員会アドバイザー・京都大学大学院工学研究科助教）

洛西ニュータウンの将来像の検討にあたっては、ニュータウン全体を視野にいれて取り組むことが必要である。本日の3つのテーマは、洛西ニュータウン全体を考えるという点で非常に有意義であった。上田先生からの講演を踏まえて、洛西ニュータウンの魅力を再認識するとともに、創生推進委員会がその魅力を活かした事業を積極的に展開することに期待している。

